

令和6年産 美里地区の大豆情報



第2号 令和6年7月10日

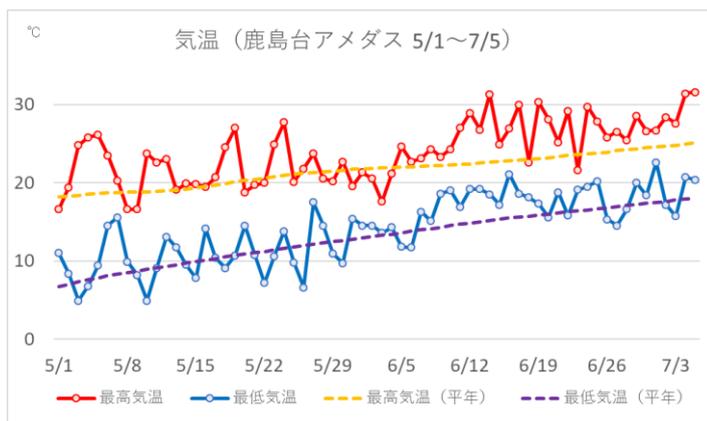
宮城県美里農業改良普及センター

TEL:0229-32-3115

FAX:0229-32-2225

<https://www.pref.miyagi.jp/site/misato-index/>

1 気象経過及び生育状況（鹿島台アメダスより）



	日照時間 (h)	平年比 (%)	降水量 (mm)	平年比 (%)
5月上旬	67.1	108%	4.0	14%
5月中旬	69.7	113%	36.5	115%
5月下旬	89.1	126%	27.5	82%
6月上旬	48.3	83%	78.5	255%
6月中旬	93.6	208%	0.0	0%
6月下旬	45.3	110%	27.5	55%

気温は概ね高温で推移しています。特に6月に入ってから最低気温が平年より高い傾向が続いています。降水量は5月中旬・下旬はほぼ平年並みでしたが、6月上旬にまとまった降雨（6月2日：60.5mm）があり、一部ほ場では滞水が見られました。6月上旬以降は降雨が観測されない日が多く、日照時間は概ね平年を上回って推移しています。

【本年度大豆の生育の特徴】

【標播】

- ・昨年度の生育経過（高温条件などで品種によって青立ち株が発生）を受けて、播種日程は昨年よりやや遅く、概ね6月上旬に始まりました。比較的早めに播種したほ場では出芽は良好で、早いものでは主茎長30cm位となっています。
- ・その後、6月中は19日間連続で降雨が観測されないなど、乾燥した状態が続き、粘土質のほ場では、碎土率が確保できないほ場などが散見され、播種精度にも影響が出たことから、出芽にばらつきが見られています。ほ場が乾燥していたことから、土壌処理剤の効果が不十分なほ場も見られ、雑草（タデ、アサガオ等）の発生が早いほ場が見られます。
- ・6月上旬までに播種したほ場では、6月中旬頃から1回目の中耕培土作業が始まり、6月中旬以降に播種したほ場では、これから1回目の中耕培土に入るほ場が多いと見られます。



出芽不良が見られるほ場

【麦後晩播】

- ・麦類の成熟が例年より早く、収穫作業も天候に恵まれ順調に行われたため、麦後大豆の播種も概ね順調に実施されました。7月上旬で計画の9割程度が播種されました。出芽は概ね良好です。

2 今後の管理

(1) 湿害対策 排水状況を確認し、局地的な大雨等に備えましょう

- ・中耕培土、除草などの作業が一日でも早く実施できるよう、ほ場の排水機能を確認・改善して、ほ場表面や明きょ内に停滞水が無くなるようにしましょう。
- ・湿害により根粒の活性が低下するなどして、葉色が著しく淡い場合や生育不良が顕著な場合には、速効性肥料（窒素成分で2~3kg/10a程度）を施用して生育回復を図りましょう。

(2) 中耕・培土 大豆の生育にとって重要な作業です。 遅くとも開花10日前までに実施しましょう。

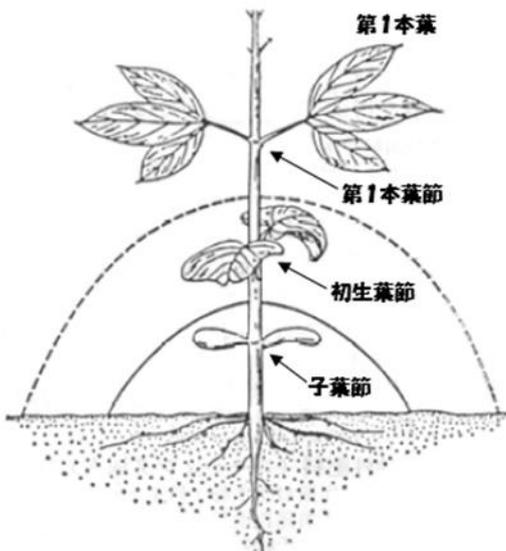


図 中耕培土の目安

普通栽培

- 1回目：本葉2~3葉期に子葉節が隠れる高さまで
- 2回目：6~7葉期に初生葉が隠れる高さまで

晩播栽培（麦後）

- 本葉5~6葉期に子葉節が隠れる程度の高さまで

※培土により大豆の節から「不定根」が発生し、生育促進、倒伏防止、増収の効果がある他、土壤通気性・排水性の改善、除草等の効果があります。

※遅い時期の中耕・培土は、主茎や分枝の損傷、断根により生育に支障をきたすおそれがあるため、開花の10日前までには終わるようにしましょう。

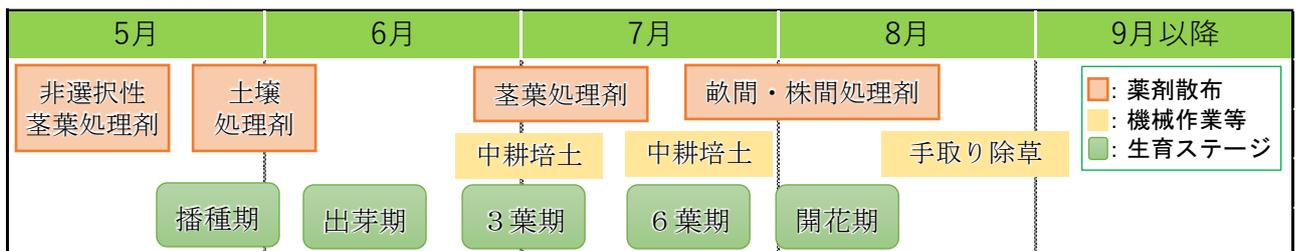
(3) 追肥 「開花期~幼莢期」の窒素養分吸収を補いましょう

- ・乾物生産が旺盛となる「開花期~幼莢期」の窒素供給は増収効果があります。（地力の高いほ場では効果が低いため、ほ場の状況に合わせて実施を検討しましょう）
- ・根粒菌の活動を抑制しにくい被覆肥料（40日タイプ、窒素成分で5kg/10a）を使った最終培土期（普通播栽培では7月中旬（本葉6~7葉期）、晩播栽培は8月上旬（本葉5~6葉期））を検討しましょう。

(4) 雑草防除 雑草対策の第一は大豆の生育を揃えることです

- ・砕土率が確保できなかったり、散布後の降雨により土壤処理剤の効果が不十分で、雑草が発生しているほ場では、今後の雑草防除が重要となっています。「中耕培土」、「茎葉処理除草剤」、「畦間・株間の機械・薬剤除草」など、どの方法をいつ実施するべきか検討しましょう。

<一般的な防除体系>



※土壤処理剤の効果はほ場条件等でバラつきます！発生している雑草の種類を踏まえて茎葉処理剤を選択しましょう。中耕培土などの管理作業スケジュールについては、薬剤処理時期で判断しましょう（アサガオ類などの難防除雑草は大豆2葉期頃から防除）。

＜茎葉処理剤による草種ごとの対策＞

茎葉処理剤は、雑草の種類や発生程度等を確認してから散布できるので、必ずほ場ごとに発生状況を観察し、高い効果の得られる剤を選択して使用しましょう。また、大豆への薬害や雑草への効果を勘案しながら、各農薬の適用上の使用時期を守って散布しましょう。

茎葉処理剤の処理時期・効果の目安（詳細は、宮城県「普及に移す技術」第94号を参照）

	アタックショット乳剤	大豆バサグラン液剤	パワーガイザー液剤
シロザ	4葉・5cmまで	2葉・3cmまで（中）	◎
ホソアオゲイトウ	6葉・10cmまで	3葉・3cmまで（中）	◎
イヌホオズキ	10cmまで	6葉・5cmまで（中）	◎
オオイヌタデ	2葉・3cmまで	15cmまで（高）	◎（イヌタデ）
アメリカセンダングサ	－	20cmまで（高）	◎～○
オオオナモミ	4葉・10cmまで	6葉・15cmまで（中～高）	◎～○（オナモミ）
アレチウリ	5葉・つる化前まで	5葉・つる化前まで（中）	○～△
マメアサガオ	4葉・つる化始まで	3葉・つる化前まで（中）	◎～○
アメリカアサガオ	2葉まで	2葉まで（低）	◎～○
イチビ	6葉・15cmまで	6葉・15cmまで（高）	◎～○
クサネム	1葉・2cmまで	－	△
ツユクサ	－	－	△～×

注1）大豆バサグラン液剤欄の（ ）は、低日照時の除草効果の安定性を示す。

注2）パワーガイザー液剤の詳細は、BASFジャパン(株)「パワーガイザー液剤技術資料」を参照。

【参考】茎葉処理剤の使用時期

農薬名	使用方法	使用時期
大豆バサグラン液剤	雑草茎葉散布 又は全面散布	だいたいの2葉期～開花前（雑草の生育初期～6葉期）（但し、収穫45日前まで）
	畦間雑草茎葉散布	だいたいの生育期（雑草の生育初期～6葉期）（但し、収穫45日前まで）
アタックショット乳剤	雑草茎葉散布 又は全面散布	本葉2葉期～開花前（雑草生育期）（但し、収穫45日前まで）
パワーガイザー液剤	雑草茎葉散布 又は全面土壌散布	出芽直前～3葉期まで（雑草発生始期～2葉期）
	畦間雑草茎葉散布	生育期（雑草発生揃期～2葉期）（但し、収穫30日前まで）

記載している農薬情報は、令和6年7月1日現在のもので、使用に当たっては、最新の登録情報を確認の上、周辺の他作物への飛散等に十分注意してください。

(5) 病害虫対策 発生病害虫に合わせて、効果的に防除しましょう

- 大豆の病害虫防除は、連作ほ場か、輪作ほ場か、ほ場や子実のこれまでの被害発生状況はどうだったか、防除体系はどうだったか、といった様々な条件で病害虫の発生自体が大きく変わってくるため、効果的で効率的な防除を行うためには、どの病害虫を対象とすべきか整理しておく必要があります。

【主な病害虫】

●紫斑病

タンレイでは特に注意が必要ですが、管内のタチナガハでも発生が見られています。成熟期の平均気温が18±3℃で、降雨が多いと発生が多くなります。開花期後20～35日に1～2回防除（同一剤を使用しない）しましょう。

●マメシクイガ

連作ほ場で多発します。幼虫が子実の縫合線に沿って食害します。8月末～9月始めに1回目の防除、その7～10日後に2回目の防除を行いましょう。日長に反応して休眠覚醒するため発生時期の年次変動は少ない傾向があります。

●フタスジヒメハムシ

連作ほ場で多くなります。子実に黒色の斑点が生じるほか、大豆の生育期間中に葉を食害（円孔状）します。若莢の表面を舐め取るような食害痕が特徴で、莢の食害部分から雑菌が侵入して被害粒が生じます。

●ダイズシストセンチュウ

播種2か月後頃に根に寄生しているのを確認（白～淡黄色で約0.6mmのレモン型の雌成虫）できます。寄生されると、葉が黄化して茎葉が生育不良となり、線虫の密度が高まるほど症状も著しくなります。作業機械や長靴などに付着してほ場間を移動するので、発生ほ場を確認した場合は注意が必要です。土壌処理剤で短期的に根絶するのは難しく、抵抗性品種や緑肥作物、田畑輪換など複合的な対策が必要となります。

●ジャガイモヒゲナガアブラムシ

平成12年に県内各地で大発生し、吸汁被害により葉が早期落葉して大きく減収しました。

被害形態からの害虫の検索

① 莢内の子実が食害される。 子実が縫合部に沿って食害され、莢に小さな半月形の脱出孔がある。----- マメシクイガ 若い子実が食害され、莢も外側が不規則に食害される。----- ダイズサヤムシガ
② 莢が奇形となる。 子実が肥大せず、莢も発育を停止して奇形莢となる。----- ダイズサヤタマバエ
③ 子実が変質、変形する。 a 若い子実では発育を停止する。 b ある程度発育してからは子実が変形し、正常な丸みを帯びない。 c 肥大が完了した子実では、変形はしないが吸汁痕が白濁したり黒変する。 ----- ホソヘリカメムシ ----- アオクサカメムシ ----- ブチヒゲカメムシ
④ 莢の表面に食痕がある 莢の表面に舐め取られたような食痕があり、中の子実が黒変している。----- フタスジヒメハムシ

莢や子実を加害する主要害虫と被害の様相

(6) 今年作で参考にしたい技術（干ばつ時の対策）

＜畦間かん水＞……着莢数を確保して増収

大豆は、開花期までは排水対策に重点を置いて生育量を確保しますが、開花期以降は干ばつ対策を実施することで、着莢数が増加し、収量増加につなげることができます。

干ばつ対策としては、暗きよの開閉（乾燥時は閉め、降水時は開放）管理や畦間かん水の実施があります。畦間かん水では通水・排水とも速やかに実施する必要がありますので畦間の溝や明きよ・排水溝のつながりについて、実施前に確認しておくことが大切です。なお、もともと地下水位が高いほ場や当該期間の天候次第では逆効果となる場合があるので、条件によって実施を検討しましょう。

開花期から子実肥大期
(7月末～8月末頃)

…… 大豆の生育で最も水分が必要な時期



農薬危害防止運動実施中（6月1日～8月31日）

1. 適切な防護装備の着用を徹底しましょう
2. 土壌くん蒸剤を使用した後の適切な管理をしましょう
3. 住宅地等で農薬を使用する際には、周辺への配慮及び飛散防止対策をしましょう
4. 農薬の保管管理を徹底しましょう
5. 農薬容器のラベルをよく読みましょう